

# 近世初期の送り仮名 — 和泉流古狂言『和泉家古本』の場合 —

坂口 至

—

送り仮名に関して、中世・近世が「社会的規範もなく、個人の恣意的用法にまかせられていた時代」<sup>(1)</sup>であることは、それらの時代の文献に馴れ親んだ者にとっては常識と言ってよいかも知れない。しかし、例えば、かつて同じように考えられていた同時期の仮名遣いにおいては、定家仮名遣いの影響を除いても、部分的に個人を超えた共通項——「無法の中の法」<sup>(2)</sup>とでも言うべきものがあるらしいことが、実態調査が進むにつれて、次第に明らかになってきている。<sup>(3)</sup>当然、送り仮名についても同様の期待を抱いてよい筈であるが、今のところ研究が不十分で、今後の研究の進展を待つべきもののようにある。

その一方で、極端に個人的な送り仮名表記が、一体どこまで許容され得るのかという、いわば「恣意の限界」についても興味のあるところである。

いずれにせよ、送り仮名の歴史的変遷を描くには、多くの地道な実態調査の積み重ねが必要である。<sup>(4)</sup>

本稿では、その一つの実践として、近世初期の写本の一つを取上げて見たいと思う。具体的には、能狂言の一流派である和泉流の古写本『和泉家古本』（承応・元禄頃写）である。この時期のこの種の写本を選んだのには、次のような相応の理由がある。

まず、近世初期という時期であるが、漢字と仮名の交用がほぼ過不足ない状態に至っており、様々な文法的場面において送り仮名が観察できると考えられるからである。刊本でなくまず写本を取り上げる理由は贅言を要しないだろう。刊本

でもその表記の個性は大いに考えられるが、写本は常識的にもその上を行く筈である。狂言の古写本であるのは、一つには、他見の範囲が最小限と見られ、個人的表記が出易いと想像されるからである。また、言語量が多く帰納的発言の信頼性が高いこと、口語資料であるため伝統的な文法的接続以外の文脈においても多くの送り仮名を観察できる利点があること、なども挙げられる。

なお、使用底本には、『日本文化史料集成5 狂言』(三一書房)に翻字されたものを用いる。<sup>(5)</sup>

## 二

『和泉家古本』(以下『古本』と略記)は、科白とト書きとからなる本文を収めた『六議』五冊と、語りや歌謡を収めた『抜書』二冊とから成っている。両者は同一の人の手になるものようであるが、『抜書』の詞章は伝承性が強く、その表記も先人のものを受け継いでいる可能性が無いとは言えないので、考察の対象からひとまず外すことにする。『六議』には、「一」「二」「四」「五」「六」(「三」は散逸)がそれぞれ四二曲、「六」が十三曲の計一八一曲が収められているが、ここでは各冊の冒頭十曲、計五十曲を考察の対象としたい。各冊を考察することによって、表記上の偏りがある場合に対処し得るであろうし、五十曲という数で言語量もほぼ十分と考えられるからである。なお、本文の科白とト書きは、原則的に前者が平仮名交り、後者が片仮名交りで書かれているが、送り仮名の方針は同一のようであるので、両者を一括して検討する。

さて、『古本』において送り仮名に関係していると考えられる品詞は、動詞・名詞(転成名詞が大部分)・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞などがある。

まず、最も用例の多い動詞から見えていくことにする。『古本』の送り仮名に、どのような法則性があり、それがいかな

る論理に支えられているかを、あらかじめ推測することはできないが、これまでの研究によれば、少なくとも活用語尾を基準にしている可能性は小さいであろう。それは、例えば四段動詞「行く」一つ取っても、次のように明らかである。

未然形 大社へ年を取に行かうト云 (11下)<sup>(6)</sup>

連用形 脇ノイサへ行下ニイル (117上)

終止形 いざ下向せうと云て二人共に行 (10上)

連体形 奏者のノキワへ行事此類同シ (20上)

已然形 其樽をさへ持て行はよひと云 (179下)

命令形 それへ参先さきへ行ト云 (13上)

右の様相から、当然個々の語によって送り仮名が定められていることも考えられない。とすれば、たまたま活用形別に列挙した、その活用形というのが、案外意味を持って来るかも知れない。そこで、試みに、活用形のうちでも用例数の多い連用形の中で、さらに最も出現頻度の高い、接続助詞「テ」に上接する場合から見とみることにしよう。数字は用例数。送り仮名はこの本の一般的な表記による。なお、複合動詞は別に考察する。

A、送り仮名を送らない語

云て753 持て67 取て43 立(たつ)て19 立(たて)て19 存て15 着(つい)て15 入(いれ)て13 打て13

有て10 笑て8 聞て7 過て6 請(うけ)て5 語て5 切て4 給(たべ)て4 致て3 入(いっ)て3

売て3 追て3 仕(つかまつ)て3 成(なつ)て3 引て3 置て2 調(ととのえ)て2 留(とめ)て2

乗て2 拾て2 逢て1 承て1 納(おさまつ)て1 驚て1 書て1 買て1 畏て1 掛(かかつ)て1 掛(か

け)て1 定(さだまつ)て1 定(さだめ)て1 尋て1 通(とおし)て1 留(とめ)て1 飛で1 咄て1

待て1 貰て1 酔て1 渡(わたつ)て1

B、送り仮名を送る語

思ふて7 返(帰)して2 下(くだ)って2 生れて1 吟じて1 定りて1 参じて1

C、A、Bにユレのある語

参て19 参って4 帰て4 帰って1 通て3 通って1 上て2 上(のぼ)って4

一見して明らかかなように、接続助詞「テ」が下接する場合は、送り仮名を送らないのが原則のようである。活用型の区別も見られない。送り仮名を送る語は、「思ふて」以外は、例数が不足気味ではあるが、終止形の音節数が三以上のものに限られる。勿論、誤読を防ぐためと考えられる語もあるが、Aには更に多くの誤読の危険性のある語が含まれており、明らかに第一条件ではない。Cもまた三音節以上の語ばかりである。すべてう行四段動詞であるのも、偶然でないのかも知れない。

次に同じ連用形のうち、助動詞「タ」に上接するものを見てみる。

A、送り仮名を送らない語

畏た44 云た28 申た19 仕(つかまつ)つた12 聞た10 存た6 有た4 入(い)つた4 承た3 売た2 打た2  
尋た2 預(あずか)つた1 逢た1 入(いれ)た1 置た1 納(おさめ)た1 驚た1 書た1 買た1  
極(きわま)つた1 下(くだ)つた1 蒙た1 立(た)つた1 給(たまわ)つた1 付(つ)い)た1 咄た1  
舞た1 渡(わた)つた1

B、送り仮名を送る語

見へた5 思ふた2 吟じた1

C、A、Bにユレのある語

参た 参った4 取た5 取った1 致た4 致いた1 上た1 上(のぼ)つた2

接続助詞「テ」が下接する場合と全く同じと言ってよいだろう。Bの「見へた」は「見た」への誤読防止のためと考えられる。B、Cはやはりほとんど三音節以上である。「取った」のみ例外であるが、ラ行四段動詞ではある。

これらによって、連用形の場合の送り仮名がほぼ明らかになったかと思うが、連用形その他の接続形式も挙げておく。以下、下接の活用語は終止形で示す。

\*連用中止形

A、置5 行2 入(いれ) 1 着(つき) 1 引1 見付1 持1

B、上(のぼ)り3 帰り2 清め1 蒙り1 廻し1

C、参1参り2

\*補助動詞「候」に上接

B、通り候2 蒙り候1 進じ候1

\*助動詞「タイ」に上接

A、承たい3 申たい3 云たい2 仕(つかまつり)たい2 入(いり)たい1 買たい1 尋たい1 給(たべ)たい1 取たい1

\*助動詞「マラスル」「マスル」に上接(「マラスル」で代表させる)

A、申まらする10 成(なり)まらする6 聞まらする3 置まらする2 買まらする2 取まらする2 持まらする2  
上(あげ)まらする1 云まらする1 入(いり)まらする2 追まらする1 切(ぎり)まらする1 尋まらする1 立(たち)まらする1 給(たべ)まらする1 咄まらする1 待まらする1

B、帰し(返し)まらする2 見へまらする1

C、参まらする6 参りまらする2 納まらする1 納めまらする2

次に、動詞の他の活用形の送り仮名を検討する。

終止連体形は、用例としては最も多い。ト書きを調査範囲に入れたためと思われる。この二形は送り仮名に関する限り、別々にする必要はなさそうである。以下、連用形と同様の方法で列挙してみよう。

A、送り仮名を送らない語

云 1861 行 94 有(あり) 40 名乗 31 置 19 候 12 立 9 打 8 着(つく) 8 追 5 引 5 笑 5 待 4 逢 3  
 替(かわる) 3 聞 3 切 3 取 3 成(なる) 3 舞 3 望 2 明(あくる) 1 売 1 語 1 漕 1 住 1  
 咄 1 読 1

B、送り仮名を送る語

出る 91 存る 45 留(とむ)る 17 通る 14 立(たつ)る 12 上(のぼ)る 12 仕(つかまつ)る 11 出す 8  
 合(あわす)る 6 渡す 6 致す 5 帰る 5 入(いる) 4 納(おさむ)る 4 思ふ 4 返す 4 吟ずる 4  
 下(くだ)る 4 渡る 4 拝む 3 見る 3 休む 3 捧る 2 尋る 2 見ゆる 2 上(あぐ)る 1 生きる 1  
 来る 1 暮る 1 死ぬる 1 過る 1 頼む 1 遣す 1 作る 1 付る 1 残る 1 上す 1 廻る 1 見する 1  
 C、A、Bにユレのある語

有 149 有る 1 申 62 申す 17 入 23 入る 49 参 5 参る 36 仕 1 仕る 11

ここでは、明らかに連用形とは異なった原理が支配しているようである。すなわち、原則的に、二音節語は送り仮名を送らず、三音節以上の語は最終音節を送るという。例外で比較的用例の多いものでは、「出る」と「出す」、あるいは

「通る」「上る」のように送り仮名によって自他などで対応する語との区別を明確化し得るものがあるが、二音節語では特に連用中止形や転成名詞（いわゆる居体言）との区別がつかず、誤読を防ぐという意識は希薄なようである。その他、「思ふ」が連用形も含めて必ず語尾を送ること、「参る」の表記がここでもユレていることなどが注意される。

次に未然形の送り仮名について。下接語によって分類してみる。

\*意志推量助動詞「ウ」「ウズ（ル）」「ン」に上接（「ウ」で代表させる）

A、売1 買1 行1 遊う1 買う1 尋う1

B、申さう24 仕（つかまつ）らう8 帰らう4 見せう4 致さう2 上（のぼ）らう2 行かう1 置かう1

使わう1 慰まう1 休めう1

C、参う1参らう34

\*打消助動詞「ズ」「ヌ」に上接（「ヌ」で代表させる）

A、及ぬ11 入ぬ（いれ）1 売ぬ1 存ぬ1 調（ととのえ）ぬ1

B、申さぬ4 参らぬ3 候はぬ1 残らぬ1

C、覚ぬ1覚えぬ1

\*助動詞「ルル」「ラルル」に上接

A、仰らるる16 掛らるる1

B、申さるる30 下さるる21 参らるる2 笑わるる2 遣さるる1 通らるる1

\*複合助動詞「セラルル」「サセラルル」に上接

A、入させらるる1 請させらるる1 持せらるる1

B、覚えさせらるる1 下らせらるる1 通らせらるる1 上らせらるる1 参らせらるる1 守らせらるる1 休

ませらるる1

C、帰せらるる1 帰らせらるる1

\*助動詞「スル」「サスル」に上接

A、持する3 植さする1 聞する1

B、参らする2

\*助動詞「マイ」に上接

A、給(たべ)まい1

\*接統助詞「バ」に上接

A、云ば1

B、申さば3 候はば1 通らば1

\*打消「イデ」に上接

B、申さいで2 仕らいで1

\*希求助詞「バヤ」に上接

B、申さばや3

未然形では、見ての通り送り仮名を送る方が優勢である。尤も、その大部分は、終止形と同様、終止形三音節以上の語であり、原則として漢字に二音節分を担わせるといふ原理が働いているとも考えられる。なお、意志推量助動詞「ウ」などに上接する場合のAの例中、助動詞までも送らないという極めて珍しいものがある。例えば次のようなものである。

※何方へそ遊山に出うとおもふか何とあらふそト云／一段よふ御さらうト云／何方へ行そト云(60上)  
右は連体形と取れないこともないが、文脈的には「いかう」と読むのが最も自然である。

次に、已然形。用例は少ないが傾向は明瞭である。



\*接統助詞「バ」に上接

A、行は 1

B、通れは 4 申せは 4 候へは 2 承れは 1 出れは 1

\*接統助詞「下モ」に上接

B、候へとも 4 申せとも 4 入(いる)れとも 1 下(くだ)れとも 1 尋れとも 1 給われとも 1 見れとも 1

但し、この場合は、誤読の防止のためとも考えられる。この本では、原則的に濁点が付されていないので、送り仮名が無ければ、終止形+係助詞「ハ」あるいは終止形+接統助詞「トモ」と区別がつかないのである。

最後に命令形を検討する。

A、行 10 買 1 聞 1

B、申せ 5 入れい 3 仕れ 3 通れ 2 見よ 2 納めよ 1 思へ 1 覚へい 1 心得い 1 候へ 1 給われ 1 出

よ 1 参れ 1 見せい 1 持て 1 休め 1

C、引 1 引け 1

命令形は、二音節語に送り仮名を送らないことがあり、三音節以上になれば送るといふ点で終止形に良く似ていると言えよう。

以上、各活用形別に『古本』の送り仮名の様相を見て来た。活用形によって、送り仮名の実態が異なっていることが明らかになったと思う。しかし、各活用形に一貫している送り仮名の原則というべきものがやはりあるようで、それは一口で言えば、一字の漢字に一音節の仮名を担わせることを避け、多く二音節分を充てるといふものようである。二音節動詞の連用中止形、終止形、命令形が多くの場合送り仮名なしとなっているのも、これによってよく理解できるであろう。

この大原則に、下接語による拘束(例えば接統助詞「テ」や誤読防止への配慮が副次的に作用して『古本』の送り仮名

を成立させているものと考えられる。「参る」など送り仮名にユレの見られる語は、この三つが調和できない場合に現れると考えられる（どれかを優先させ、不統一を避ける場合が多いが）。

さて、本節の最後に、複合動詞の送り仮名を簡単に覚えておきたい。今日接頭語として扱われているものも含む。用例数は省略に従う。△ △内は後部成素の活用形を示す。

\* A (送り仮名なし) 形式 + A 形式

云合(あわせ)△用△ 云置△用△ 云置△止体△ 云付△未△ 云付△用△ 承及△用△ 請取△用△ 打入△用△  
仰付△未△ 追掛△用△ 思召△用△ 思召△止体△ 思召△已△ 引合(あわせ)△用△ 引立△用△ 参合  
(あわせ) △用△ 参付△用△ 罷帰△用△ 待合(あわせ) △用△ 申上△未△ 申上△用△ 申合(あわせ)  
△用△ 申付△用△ 行着△用△ 行着△止体△

\* A 形式 + B (送り仮名あり) 形式

云出し△用△ 謡出し△用△ 謡出す△止体△ 打出す△止体△ 咲出る△止体△ 作出す△止体△ 取出し△用△  
引立る△止体△ 吹出す△止体△ 罷帰り△用△ 申入(いる)る△止体△ 笑出す△止体△

\* B 形式 + A 形式

預け置△未△ 思ひ入(いれ)△用△ 思ひ切△用△ 思ひ立△用△ 思ひ出△用△ 捧げ申△止体△ 伝へ聞△用△  
参り合(あわせ) △用△

\* B 形式 + B 形式

上り合(あわす)る△止体△

予想されたことであるが、複合動詞の前部・後部成素の送り仮名は、単純動詞のそれに従っていると一言してよいだろう。

四

次に、名詞（転成名詞など）・形容詞・形容動詞・副詞などの送り仮名を検討する。

① 転成名詞など（複合語を含む）

A、送り仮名を送らない語

仕舞 36 仕合（しあわせ） 12 望 8 見舞 8 掛物 6 使 6 幸（さいわい） 5 心持 4 猿引 4 始（はじめ）  
 4 語 3 羽織 2 相舞 2 お流 2 取 2 取成 2 名残 2 乗物 2 負 2 笑入 2 犬死 1 謡 1 売 1 仰 1  
 置所 1 買手 1 聞事 1 聞所 1 志 1 小舞 1 米持 1 盛 1 立聞 1 年寄 1 とわず語 1 慰（なぐさみ） 1  
 名乗 1 野遊 1 一打 1 舟渡（わたり） 1 振舞 1 舞 1 舞下（さがり） 1 物云 1 笑草 1

B、送り仮名を送る語

思ひ人 2 上り 2 生れ 1 覚え 1

C、A、Bにユレのある語

通 90 通り 7 参 1 参り 7

動詞の送り仮名から予想された通りになっているので、特に言うことは無い。

② 形容詞・形容動詞

A、目出度（めでたき 5、めでたい 4） 能（よい） 2 能（よう） 1

B、有難い 5 久しい 5 久しう 5 大きい 4 大きう 1 若い 3 白い 1 古い 1 古けれ 2 慥（たしか）な 1 慥に 1

懇な 1 懇に 1

C、忝（かたじけない） 30 忝い 4 忝（かたじけなう） 5 忝なふ 2 多 2 多い 2 多（おおう） 1 多けれ 面白 1 面白い 1

面白く5心安1心安い1 同6同じ23

用例は必ずしも多くないが、形容詞は送り仮名のユレが比較的目立つようである。

③ 副詞・接続詞

A、扱(さて) 95 先(まづ) 59 尤(もつとも) 39 則(すなわち) 20 但(ただし) 18 追付(おっつけ) 9  
少(すこし) 9 若(もし) 5 以(もって) 5 急(いそぎ) 4 必1 併(しかし) 1 漸(ようよう) 1  
態(わざと) 1

B、惣じて6 何(いずれ)も5何れも3 少も4 或(あるい)は1 急で1

C、殊外(ことのほか) 8 殊の外2 誠(まことに) 1 誠に8 殊(ことに) 1 殊に1

副詞・接続詞は送り仮名を送らないのが原則で、「態(わざと)」「誠(まことに)」「殊(ことに)」などは、特徴的な表記と言えるかも知れない(助詞の脱落ではないであろう)。

なお、この本には、漢文に見られるような、

定而(さだめて) 7 次而(ついで) 6 頓而(やがて) 6 重而(かさねて) 3 別而(べっして) 3

という特徴的な副詞の表記が見える。一般的な、動詞+接続助詞「テ」との違いを明瞭にするためのものとも考えられるが、副詞は送り仮名を送らないという原則と関連づける方がよいのかも知れない。

④ 連体詞

A、其(その) 213 此(この) 169 彼(かの) 7 我(わが) 5

連体詞も送り仮名を送らない。

⑤ 間投詞

A、申 6

呼び掛けの言葉である。動詞などから送り仮名を送らないのは当然と考えられる。

⑥ その他

※ 此所のうとく成者ト名乗(7上)

※ いさ少成共お供申さうト云(14上)

前者は形容動詞の語尾「ナル」、後者は助詞「ナリトモ」の一部に、同じ漢字を当てたもので、それぞれ6例、22例見える。送り仮名の可能性のあるものではあるが、漢字のみに固定している。

五

以上、『古本』の送り仮名の実態を見てきたが、かなり明確な傾向性を見いだすことができたのではないかと思う。それは、

I 二音節目までは原則として送り仮名を分出しない

II 三音節目以上は様々であるが、送らないものも多い

と簡単にまとめることができるであろう。勿論、既に述べたような「下接語の拘束」と「誤読防止」の要素も無視し得ないが、これらは送り仮名を規定する最重要の条件として機能しているとは言えないようである。

この音節数の多寡という観点には、これまでの研究でも言及されており、時代を超えた共通項の候補に挙げられるかも知れない。

一方、動詞命令形の語尾に送り仮名を用いない傾向や、助動詞「ウ」を漢字に担わせる例の存在、特に後者は「恣意の限界」の好例と言えるかも知れない。

ところで、『古本』を含めて、中世・近世の多くの文献に、概して送り仮名が少ないのは、送り仮名の発達過程におけ

る過渡的性格の反映には違いないであろうが、もう少し積極的に評価することも可能であろう。すなわち、誤読の危険性というのは、あくまで読む側の論理であり、それに優先する書く側の論理が多くの文献を支配していると考えるのである。書く側の論理とは、おそらくまず「表記の能率化」である。一般に、書写の能率は、送り仮名が少ない程、また漢字に担わせる音節数の振幅が小さい程、上昇するであろう。『古本』の送り仮名が、他に劣らず少なそうであるのは、狂言の本文の言語量が膨大であり、送り仮名の頻度が高い上に、同工異曲が多く、同一語が頻出することと恐らく無関係ではないであろう。

先を急ぎすぎたようである。今後、『古本』の周辺の、例えば大蔵流の写本や、口語性の高さという点で共通する初期断本の刊本等に範囲を広げ、近世初期の送り仮名の様相を更に明らかにしたいと思う。

〔注〕(1) 原口裕氏「近代の送り仮名」(明治書院『漢字講座4 漢字と仮名』、平一) 参照。

(2) 佐藤鶴吉氏「近松の国語学的研究」(岩波講座『日本文学』、昭6) による。但し、そこでは近

松の正本内部の問題としてとらえられている。

(3) 島田勇雄氏や坂梨隆三氏に一連の論文がある。

(4) 最近の田島清司氏の論考(「送り仮名の諸相」、

九州大谷研究紀要10、昭59など)や、注(1)の『漢

字講座4』所収の佐々木峻氏、原口裕氏の論考に

類する研究が多く出ることを期待する。

(5) この種の調査では当然原本か影印本を用いるべきであるが、この本は狂言の家に秘蔵され容易に見ることが出来ず、影印もない。底本は仮名遣い等原本に忠実である。

(6) 翻字本のページ数と上下段を示す。

(さかぐち・いたる 熊本大学文学部)